

2019年 平和首長会議 青少年「平和と交流」支援事業に参加して

ン・リーピン（東京都国立市）

HIROSHIMA and PEACEに参加する前に、原爆が広島と長崎に落とされたという事実は国の歴史授業で学んだが、具体的な原因とその背景は全く知らなかった。そして、第二次世界大戦についても詳しく学ばなかったため、自分の周りに戦争が起きていない平和の状態について意識も薄かった。だが、HIROSHIMA and PEACEに参加することによって、原爆事件と第二次世界大戦についてだけでなく、それらによって現在私たちが直面している問題も学べたため、平和に対する理解を深めることができた。特に学んだことの中で印象に残ったものを以下に2つ述べる。

一つ目は、核兵器だけでなく、原子力の開発と利用も人々に悪影響を及ぼすことである。原爆は直接に広島・長崎にいる人々に害を与えるだけでなく、原爆による放射性降下物も世界中に広がったため、「見えない」被爆者（“invisible” hibakusha）もいた。そして、「見えない」被爆者を研究対象にすることができないため、放射性降下物による影響は未だにわかっていない。また、現在原子力発電によって排出される、使用済み核燃料の処理も一つの課題である。原子力発電を利用する多くの国では、使用済み核燃料を冷却保管し、地中のコンクリート構造物で保管して処理することになっている。この処理の仕方は放射能汚染のリスクがあるだけでなく、核廃棄物の半減期が長いため、将来の人々に使用済み核燃料の危険に関する警告(nuclear warning markers)の方法も問題になっている。言語は時代を経て変わるものなので、言語を使うことができない。そのため、将来の人々でも通じる印と記号を考え出すという課題が残っている。

二つ目として、メディアの役割の重要さも学ぶことができた。メディアを通じて市民はある視点からある物事を見るように方向付けられると言える。例えば、原爆についての二つの語りの違いが挙げられる。アメリカでは、原爆は戦争を終わらせることができたため、数多くの人々の命を救うことができたと思われている。それに対して、日本では、原爆は数多くの人々の命を奪った残酷な行為と考えられている。このように、市民は他の国のメディア発信源と関わりがない限り、新聞や歴史の教科書などを通じて、国の政府の視点から物事を見て理解するようになると言える。このように、メディアを操ることができるため、同じ物事でも違う視点から見るができる上に、人によって違う価値観が形成される。

次に、HIROSHIMA and PEACEで学んだことを踏まえて、国立市と相談した後の活動計画について述べる。それは、平和首長会議と連携した「くにたち原爆・戦争体験伝承者」育成プロジェクトと講話の周知と全国・海外に向けた展開である。「くにたち原爆・戦争体験伝承者」育成プロジェクトとは、国立市内在住の被爆者、戦争体験者の体験と平和への願いを次世代に語り継ぐための「伝承者」の育成を行うプロジェクトである。伝承者と認定された方は、市内小中学校、図書館や公民館で講話活動を行っている。HIROSHIMA and PEACEで、被爆者の語りを聞く機会があり、それぞれの語りには、被爆者の背景と経験したことは異なっているが、「周りに今日聞いたこと・学んだことを伝えてください」という共通のメッセージがあった。そのため、より多くの人に原爆・戦争の語りを知ってもらうように、国立市は平和首長会議と連携したプロジェクトの展開を考えている。それと同時に、HIROSHIMA & PEACEで学んだことを講話時に伝え、より多くの人々の平和に対する意識を養おうということも考えている。